〔特別展によせて〕

# アマシスの画家とエクセキアス

東京大学文学部助教授 青柳正規

紀元前九百年頃から紀元前四世紀までの約六世紀間にわたって様々な変質を遂げながらも常に一貫した造形課題を追求し、時々の条件の下にそれを克服していった一連の成果が連続性と継承性を有するが故に、一つの歴史として捉えることの可能な美術、それがギリシアの壺絵である。

一貫した造形課題とは空間を如何に表現するかということであり、世界観の形による呈示であった。ギリシア人にとっての世界とは認識可能な、文明の存在する世界であり、それをオイクーメネーと称した。その世界は、理念による認識と経験的認識が一致した総体であり、神と英雄と人間によって構成された秩序ある宇宙、つまりコスモスであった。ギリシア壺絵は常に空間表現を志向し、世界観の呈示を意図しているが故に、宇宙の原理を内に含むミクロコスモスなのである。そして、ギリシア壺絵が頂点に達する紀元前六世紀第三四半期を代表するアマシスの画家とエクセキアスが描出したのは正にそのようなミクロコスモスであった。

アマシスの画家は、陶工アマシスの壺に黒像式の絵付けをしたところからそう呼ばれる逸名の画家である。エクセキアスが描く黒人にアマシスもしくはアマソスという名前が記されているところからアマシスの画家はエジプトのギリシア植民都市ナウクラティスの出身かもしれない。いずれにせよ、彼は酩酊者を好んで描くシアーナ・カップの画家やハイデルベルクの画家の影響を受けながら紀元前六世紀中頃に独自の様式を完成する。それまでの黒像式画家が細部表現には刻線だけを用いていたのに対し、軽妙な筆による線を用いるようになり、手足の伸びやかな表現には生きる者の歓びが直截的に表わされている。その一方で、武具や衣服の描写、装飾モチーフの表現には細心の配慮があり、装飾的効果が十分に発揮されている。構図は慎重に左右対称を基本としている点で伝統的といえるが、ディオニュソス、サテュロス、マイナーダスなどの酒神とその仲間を生き生きと風俗画のように描く点では赤像式画家の先駆者ともいうべき側面も有していた。従って、明るくしなやかな人間性を中心に据えた表現こそがアマシスの画家の世界だったのである。

ディオニュソスとマイナーダス　アマシスの画家（カビネ・デ・メダイユ博物館）

アキレスとアイアス　エクセキアス（ヴァティカン美術館）

これに対してエクセキアスの描く世界は壮重厳格なものであった。人間を描く場合にも神々の如き威厳と絶対性を付与し、高貴な倫理性に満ちた世界を描き上げた。アマシスの画家のような伸びやかな描線を用いたり、赤像式の彩色法に共通する描法を用いることはなかったが、彼が描く人間には永遠性と高貴さに満ちているという点で、クラシック様式を先駆けていたといえるのである。

二人の描く世界はこのように性格を大きく異にするものである。アマシスの画家は、神々でも人間のように描き、エクセキアスは人間を神々の如く描いた。しかし、そのような相違と同時に、重要な共通性を見落してはならない。それは、神であれ人間であれ、人の形を有する存在が世界を組立て、秩序を形成しているという信念の両者に共通する表現である。その背景には神人同形（アントロポモルフィズム）という観念があることは言うまでもないが、その観念を基盤としてこれ程明確にまた具体的に人と神が支配する世界を描いた画家は、古今東西の美術を見回しても他にはいない。人間と神の間には英雄が介在し、人間は神になることが可能な世界であった。先に述べた理念と現実が一致した世界だったのである。そうであるからこそ、アマシスの画家は神々を人間のように、そしてエクセキアスは人間を神々の如く描き得たのであり、両者の世界の相違性とは、本質的には共通性に由来するものに他ならなかった。そのことは紀元前五世紀の赤像式画家によって証明されている。

この理念と現実の両者に対する認識の一致は、クラシック期の終りからヘレニズム期になると乖離の兆しを見せるようになる。そして、ローマ共和政末期には明らかに分離した二つの認識法として並存するようになる。その結果がローマ美術におけるイリュージョニズムの台頭であり、キリスト教美術の出現なのであった。その意味で、アマシスの画家とエクセキアスの両者が描く世界を異なるものとして捉えるよりも、同一のものとして捉えることによって、我々は、ギリシア壺絵の美術を西洋美術全体を概観する視座とすることができるのである。この視座に立てば、ギリシアの壺絵はただ単にギリシア人のミクロコスモスの表現としてだけでなく、西洋美術のミクロコスモスとしても把握できるのである。

アテーナー　アマシスの画家（ルーブル美術館）

海を渡るディオニュソス　エクセキアス（ミュンヘン国立古代美術館）

季刊 美のたより No.84
昭和 63 年 8 月 25 日
発行 大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.